

岡田 健

(神奈川県リハビリセンター)

日常診療にさいして、しばしば遭遇する慢性関節リウマチ96症例に対して関節のスキヤニングをおこなってきたが、今回はこれらのうち滑膜切除術をおこなった36症例の術前、術後の経過をスキヤニングで追跡し、その所見と臨床症状との関連性について検討したので報告する。

方法はまずシンチカメラを両膝関節部にセットしたのち、 $^{99m}\text{Tc-pertechnetate}$ 10mCi を静注し、その集積曲線をとる、それぞれのパターンの解析をおこなった。またこれらの集積がプラトーに達してからスキヤニングをおこなった。

結 果

(1) リウマチの炎症のつよい関節にいずれもRIの強い集積像をみとめた。

(2) 滑膜切除術をおこなった36例中26例、64%に術後シンチグラム集積の減少がみられた。また6例、16%に集積の増加があり、7例、20%は不変であった。

(3) 術後臨床症状が改善されなかった症例、あるいは術後シンチグラムで集積の増強をみた症例では再手術で滑膜の残存、増殖がみられた。

以上のことから滑膜切除術前後のシンチグラム所見は、局所の病勢判定、治療効果の判定、術後の再発時期、および再発時の病勢判定などに対するきわめてすぐれた検査法として応用できるものと考ええる。

16. $^{111}\text{In-DTPA}$ による脳脊髄腔シンチグラムの経験

福井康太郎 宮前達也

(埼玉医大・放)

長島親男

(同・脳外)

現在、我国では CISTERNOGRAPHY および MYEIOGRAPHY には $^{169}\text{Yb-DTPA}$ が広く用いられている。 ^{169}Yb は半減期が32日で、比較的長く、検査後の患者管理に問題がある。又排泄が悪

い場合は患者の被曝は大となる。最近ダイナボット社から新しく $^{111}\text{In-DTPA}$ が開発され有望視されている。 ^{111}In は半減期が28日で、CISTERNOGRAPHY には好適である。当核医学診療部において $^{111}\text{In-DTPA}$ を用いて20例の症例を経験したので、従来より使用していた $^{169}\text{Yb-DTPA}$ と臨床的に比較検討した。尿中排泄は両者に差はなく1日目で約50%、3日目で約85%排泄された。又血中クリアランスにも両者差はなく、2時間目で最高に達し、その後は徐々に下降する。被曝線量に関して、文献によると $^{111}\text{In-DTPA}$ による被曝線量は $^{169}\text{Yb-DTPA}$ それに比し SPINAL CORD で約1/2、又 WHOLE BODY では約1/4である、との報告がある。 $^{111}\text{In-DTPA}$ を使用する際、エネルギーを247KeV、173KeVの両者で比較したが、著明な差は認めなかった(スキヤン像を得る場合はインテグラルを用いて十分に診断可能な像を得ることができた)。コリメーターは1,200ホールが最適であった。正常例、異常所見のある例、いずれも $^{111}\text{In-DTPA}$ による像は $^{169}\text{Yb-DTPA}$ による像に比べて、特に差は認められなかった。

しかし1例ではあるが、 $^{169}\text{Yb-DTPA}$ を $500\mu\text{Ci}$ 投与して診断できなかった CSF-RHINORRHEA を $^{111}\text{In-DTPA}$ が2mCi 投与によって証明できた例がある。この様に被曝の面から考えて、多量に投与できる為の有利な点もある。

被曝が少なく、管理の面で有利である。 $^{111}\text{In-DTPA}$ は臨床的にも何ら問題がなく、今後は $^{169}\text{Yb-DTPA}$ にかわって、脳脊髄腔シンチグラムに利用すべきである、と考える。

17. $^{67}\text{Ga-Citrate}$ による食道癌の診断

石川礼子 牧 正子 日下部きよ子

山崎統四郎

(東女医大・放)

遠藤光男、小藤田礼章

(東女医大消化器病センター)

消化管の癌診断におけるRIの役割は他臓器に比し、まだ問題点を多く残している。なかでも食